

フォーラム「未来につなぐいわでの教育相談」  
(2013.02.15)

豊かに生き抜く力とは

—ソーシャル・リテラシーをめぐって—

学校法人樟蔭学園常任理事  
大阪樟蔭女子大学前学長・大阪市立大学名誉教授

森 田 洋 司

# I はじめに

「リテラシー」は、さまざまな学びを  
使いこなす能力であり、それを行使する  
包括的・総合的な能力

## 『提要』から読み取れる問題意識

日本社会は、今、社会のあり方の大きな転換点を迎えている。その変化を踏まえ、これからの生徒指導を展望するという視点に立つと、以下のような問題が設定されてこよう

- ①これからの日本の新たな社会モデルとは
- ②そこにおける教育の育成すべき人間像とは
- ③生徒指導のこれまでの育成目標であり人間像である「自己指導力」「自己決定力」で充分なのか

## Ⅱ 日本社会の新たな社会モデルと

その社会の形成者として求められる資質の育成

## 新たな社会モデル構築への模索の時代

「私事化 (privatization)」社会の「個人化」した人々につながりをもたせ  
社会の形成主体 (シティズン) として育成することが課題

市民の役割

官の役割

— 新たなる「公」/「民」

市民性 (シティズンシップ) 教育の役割が重要となる

Ⅲ これからの教育の育成像と  
生徒指導

## 一連の教育改革と『生徒指導提要』の取りまとめ

### ①「教育基本法」(平成18年改正)

第1条 「公教育としての学校教育の目的」  
「人格の完成」と「社会の形成者」  
「心身ともに健康な国民」の育成

### ②「学校教育法」(平成19年改正)

#### 第二一条の第一

学校内外における社会的活動を促進し、自主、自律及び協働の精神、規範意識、公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと

### ③「新学指導要領」(平成20年告示)

# 問題に対応する(問題解決的・予防的)生徒指導と 育てる(成長を促す開発的)生徒指導

対象

一部の児童生徒

すべての児童生徒

指導

課題解決的な指導

予防的な指導

成長を促す指導

ねらい

深刻な問題行動や  
悩みを抱え、それに  
適切に対処できない  
ような特別に支援を  
必要とする事態に対  
応した指導

深刻な問題に発展  
しないよう、初期に  
迅速に課題を解決  
することをねらいと  
した指導

「豊かな心と健やかな体」  
「知識や技術を社会的な場  
面で実践し行動する力」  
「自己と社会とのつながり」  
↓  
学習課程と生徒指導の一体化  
教育課程の内外に亘る指導  
教員全員が生徒指導

児童生徒理解、実態把握、課題と改善策の共通理解



## IV 日本社会の今日的課題に 대응する

### 新しい生徒指導の観点と枠組み

- 「公」を基軸とした教育の展開に向けて —  
(「私」を尊重しつつも「私」に偏らない指導)

## ① 「自己肯定感」と「加点社会/減点社会」

- ・ 自立性・自律性の基盤を成す「自己肯定感・自己有用感」  
かけがえのない人間であることの自覚/自尊感情  
人間的・社会的存在の大切さを他者から認められることによって形成  
→ 自分の大切さとともに他の人の大切さを認める態度を形成する
- ・ 日本社会の若者の自己否定感  
（「減点社会」/「加点社会」との違い）  
**加点社会**への発想の転換と「ほめること」の見直し

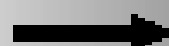
## ② いじめの国際比較調査に現れた

### 日本の子どもたちの教育課題

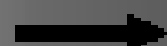
—「社会へのつながり」と「公共性への参画・協働」—

日常生活の  
仕組/行動

(力関係の乱用)



被害性



法に融れる行為

私的責任領域

子どもたち自身による  
インフォーマルなコントロール領域



子どもたち自身で、自分たちの集団が  
抱える問題を解決する能力や問題を  
抱えた仲間への支援の欠如や弱まり



自殺・不登校、成長・発達への  
悪影響などの深刻な被害

公的責任領域

大人や警察・学校などの  
フォーマルなコントロール領域

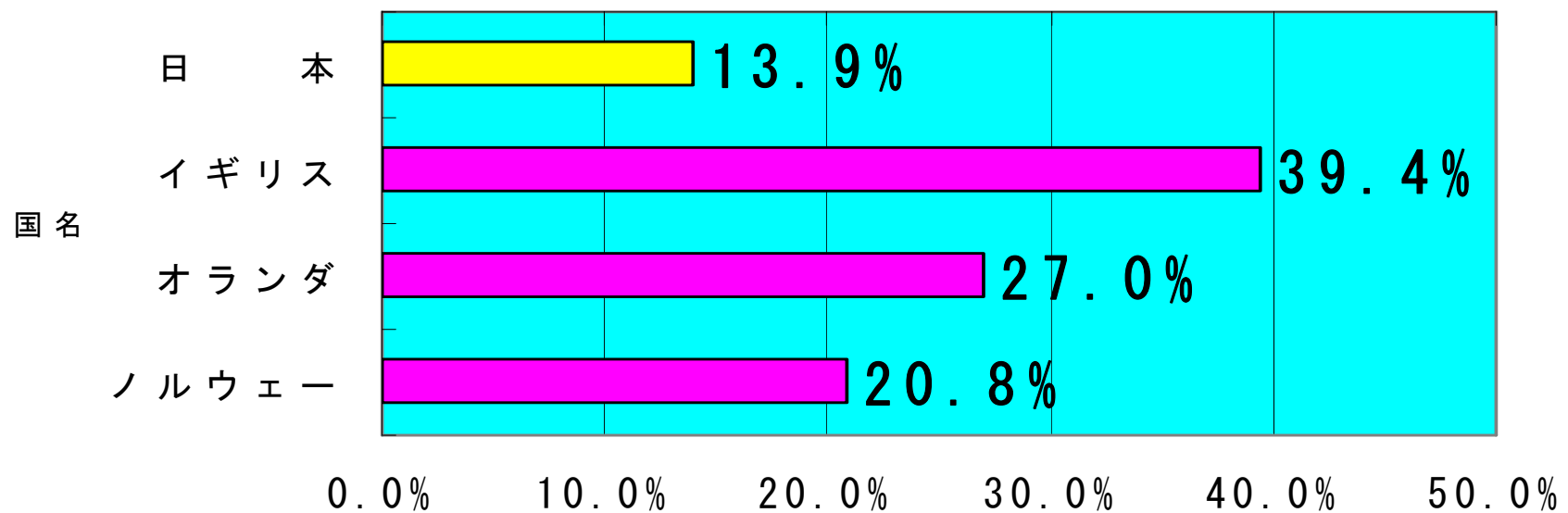


(緊急避難としての危機介入)

いじめ問題の現れ方と社会的対応の原理

# 国際的な視点から見た日本のいじめの特徴

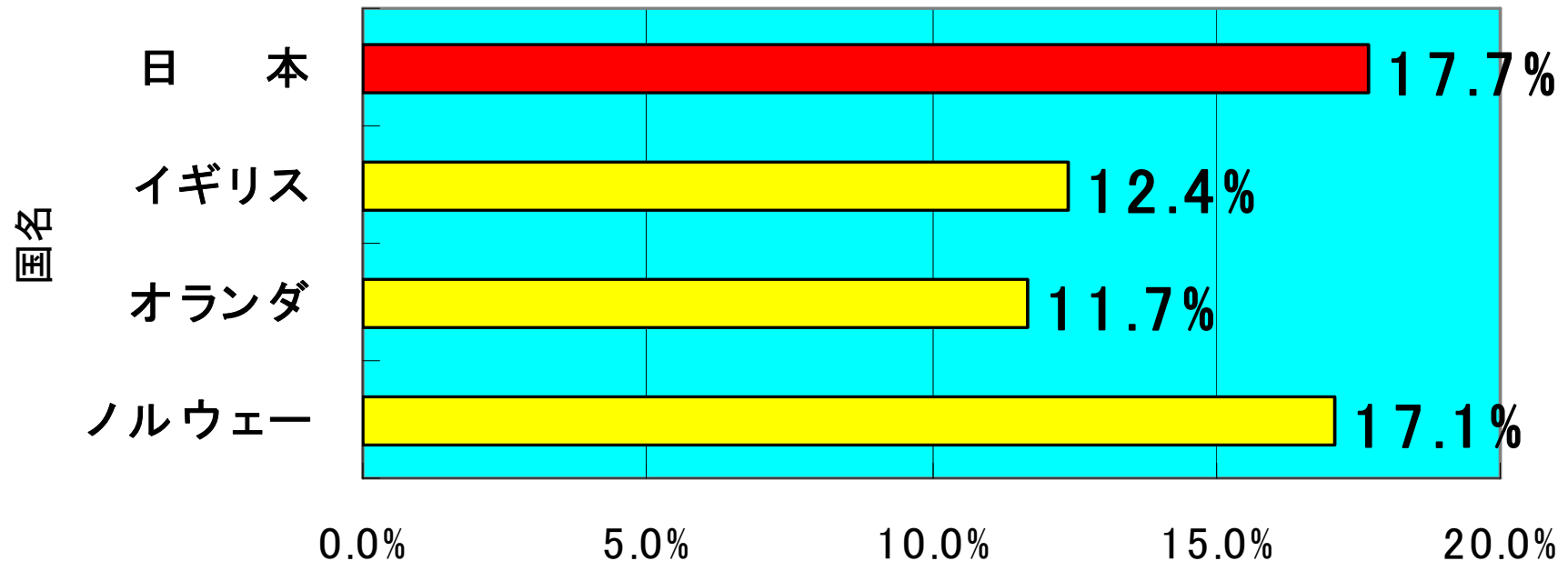
図 I 各国の被害経験率



- 日本(1996年2学期, 全国の公立小5~中3, 6,906人)
- 海外(1997年1月~4月、英・2,308人, 蘭・1,993人, ノルウェー5,171人)

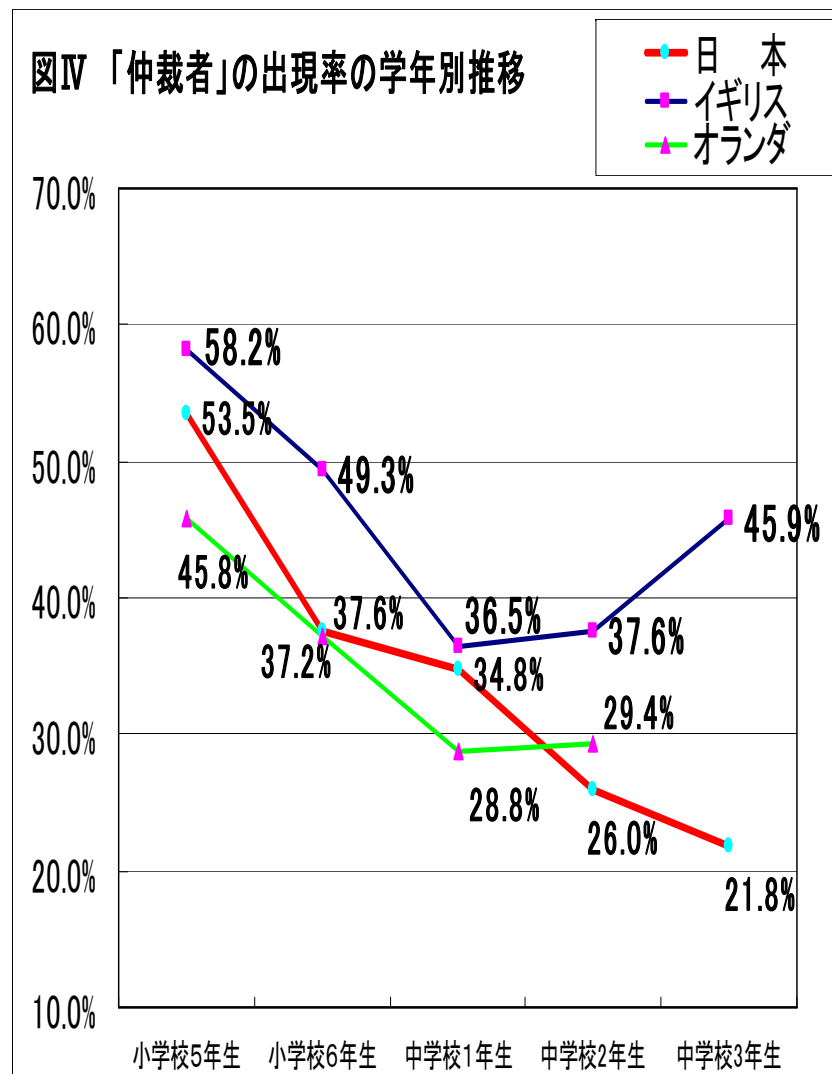
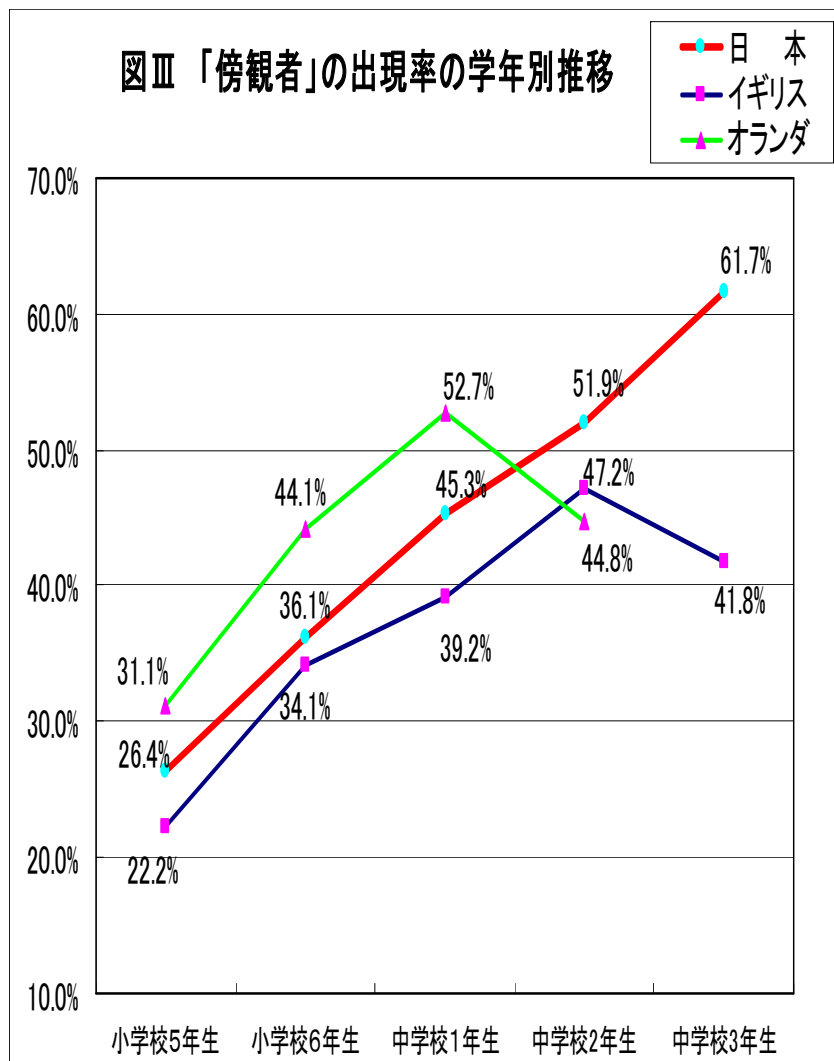
## 各国の「進行性いじめ」の経験率

図Ⅱ 高頻度・長期被害経験者の比率



- 「高頻度」とは、一週間に少なくとも一回以上いじめの被害に遭う場合
- 「長期」とは、いじめの被害が一学期以上にわたって継続するもの

# いじめの場の力学の学年別推移

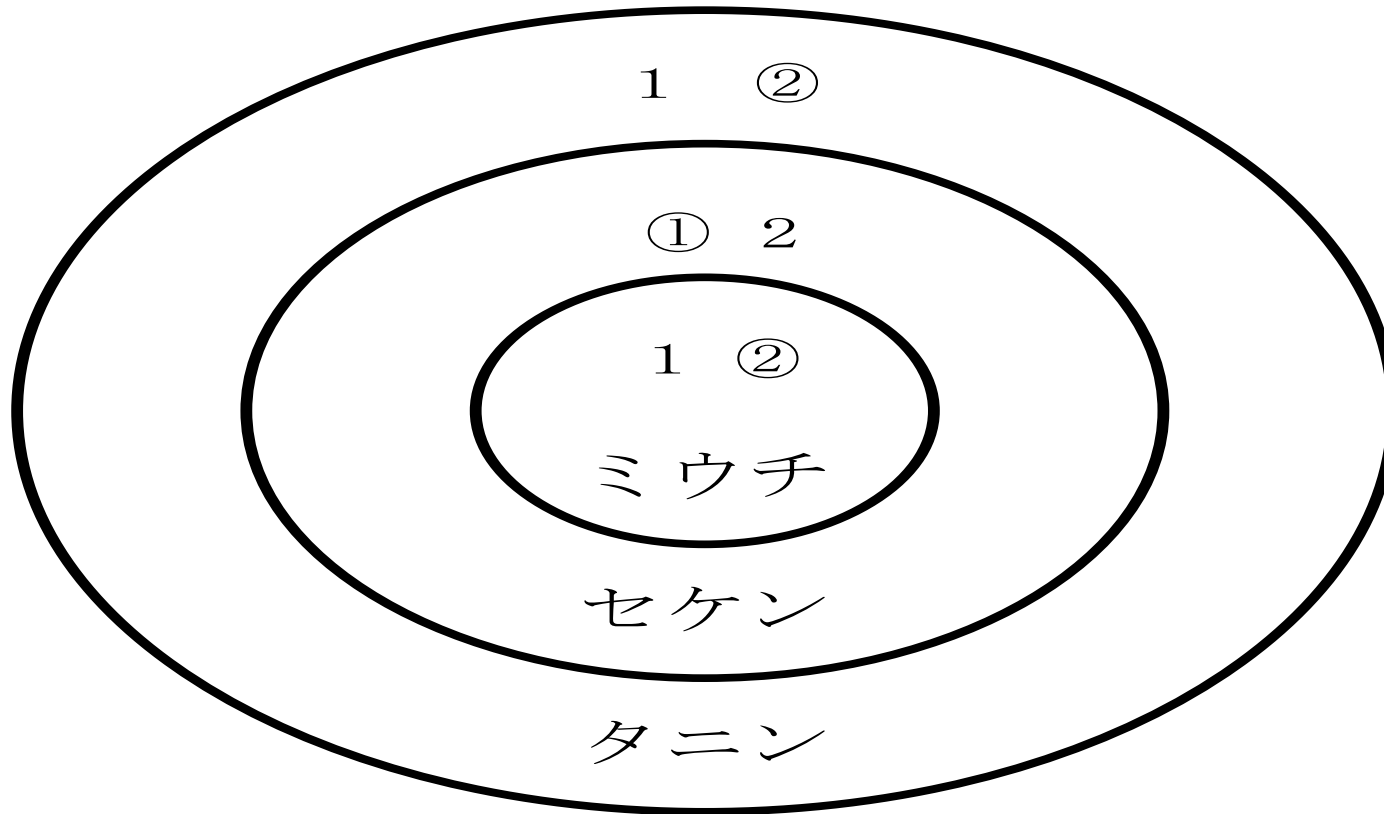


## 「傍観者」も「加害者」の意味の伝わりにくさ

- いじめ問題を当事者個人間の問題として捉えてしまい、それが集団や社会のすべての人々の安全・安心と幸福に関わる問題として取り組む姿勢が弱い  
安心して通える楽しい学校の間づくり / 社会生活の問題を解決し質の向上を図る社会づくり  
自己保身(私益)→公益・公共性へ
  - 構成員であることの自覚と責任・義務の観念の育成  
自らが家族の一員であり、社会の一員であるという自覚の形成が重要  
「集団への帰属意識」、「一体感」の醸成  
学校・家族・国家・社会との関係性が築かれていることを**実感**することが  
できなければ、社会のルールとしての法や道徳や習慣などを尊重し、  
遵守しようとする意識も形成されない
- 実感の醸成：社会的なつながりの糸(ソーシャル・ボンド)の形成  
→社会的な場での「自己肯定感・自己有用感」、「社会的有用感」、  
「学びに向き合う力」が培われ、「確かな学力」へと結びつく基盤を形成  
→ソーシャル・ボンドは、シティズンシップの基盤を成す意識



震災を契機として日本社会に現れつつある  
「公共」を基軸とした関係性の拡がり



- 1 他者性への配慮
- 2 欲求・衝動の行為化

V ソーシャル・ボンドと

その主要な構成要素

# ソーシャル・ボンドの構成要素

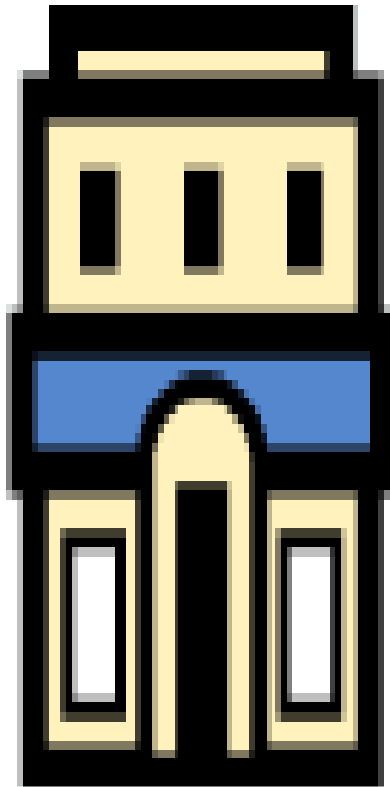
## A アタッチメント(愛着)

- 対人関係への情動的な絆
- 信頼できる人間関係 (「ナナメ」の関係の活用も)
- 集団や制度への情動的な絆と帰属感
- 成員間の連帯感

## B コミットメント

- ニーズの実現可能性
- 集団や社会の一員としての**社会的な役割(権利と義務の体系)**を果たすこと → 集団や社会からの期待に応えること  
(集団の役割と活動を通じ**成就感・達成感、自己有用感、帰属意識、社会的有用感を育成**)  
(**実践的な行動力の育成が鍵**)
- **体験活動**を通して自らの生き方や将来の社会での活動に対する夢や目的意識について考えることによる社会とのつながりの形成
- 「**柔らかな行為責任**」の育成  
(「**市民性(シティズンシップ)**」や「**社会参画**」の基礎となる意識)

# 「柔らかな行為責任」

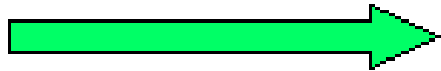


共同体の一員  
としての義務的役割



ボランティア

社会の一員としての社会的な責任を果たすべく  
個人の特性に合わせて提供する活動



ソーシャル・サービス

共同の公的な空間・施設・サービス等の便益を  
受ける者としての責任を果たすべき活動

果たさなくとも制裁はない

「する」「しない」は各人の選択



割り当てられた役割や仕事

## C インボルブメント(巻き込み)

- 驚き、好奇心、新たな発見(自己についての新たな発見も含む)、喜び、感動、充足感、義憤、悔しさなど「学び」の「ストック」となるものを学習過程の内外に亘る仕掛け(学びの「フロー」)を通じて醸成
- 顕在的な活動空間への巻き込み  
【教科等】【特別活動】【総合的な学習の時間】【学級会、児童・生徒会等の活動】あるいは【さまざまな体験活動】等への巻き込み
- 潜在的な機能を果たす離脱空間への巻き込み  
(学校行事等のイベント、部活動等)

## D ビリーフ(規範の妥当性に関する信念)

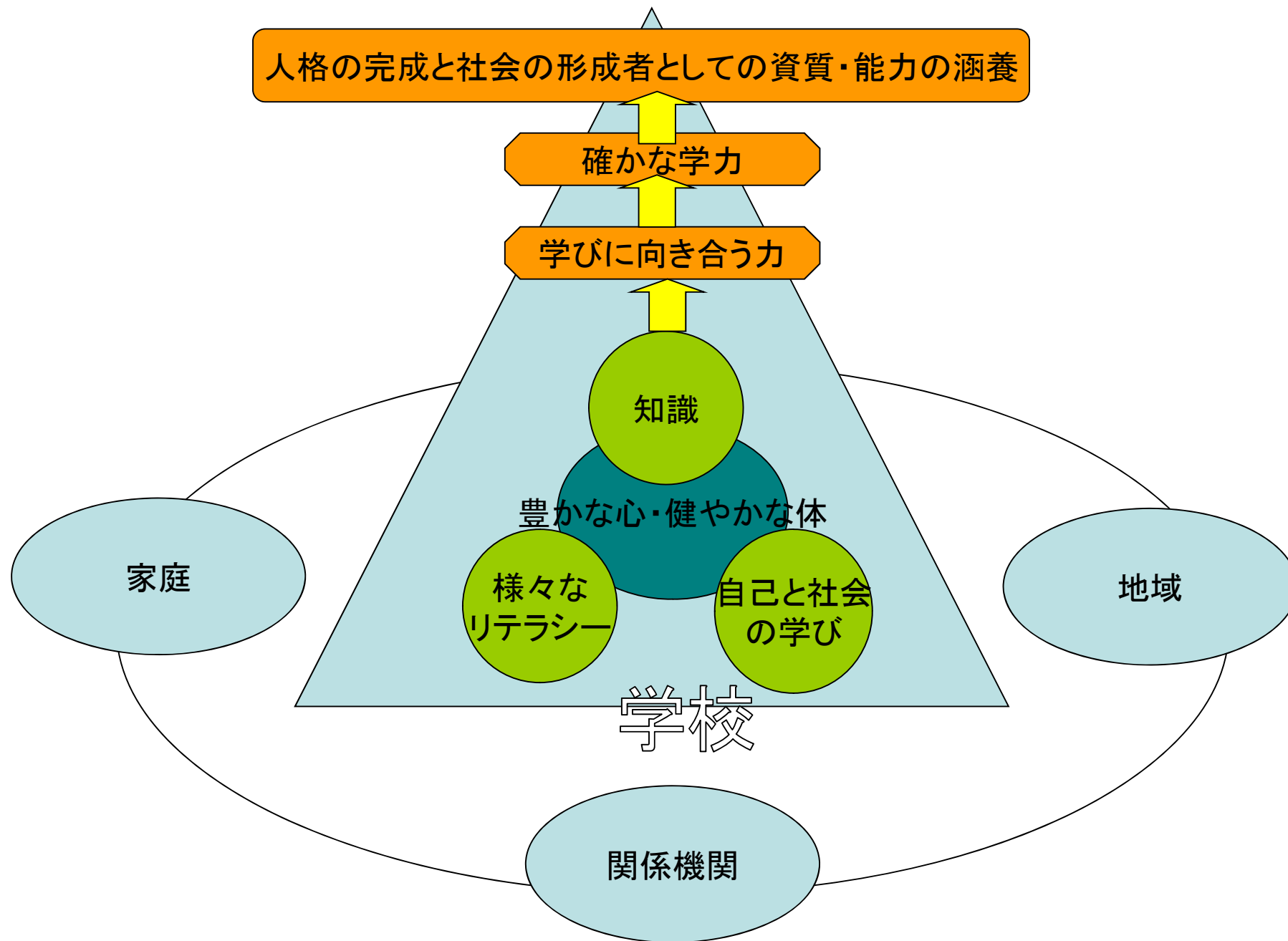
- 規範意識(妥当性の信念 **<もつともだ>** **<納得できる>**という意識)
- 「**最低限の規範意識**」(人間として生きる上で、してはならないこと)から「**高い規範意識**」(人間としていかに生きるか、いかに在るか)に至る同心円の構造として捉える必要がある
  - ・人の命を殺めない、いじめない、嘘をつかない、法律やきまりを守る
  - ・マナーを大切にし、礼儀正しくする、お互いに気持ちよく
  - ・役割と責任を果たす、公德心・公共心と社会参画、公正・公平さを保つ
  - ・モラルを確立する、誠実に生きる、自尊・自立の心をもつ、自律的に生きる
- 規範意識の育成は「**身に付けさせる側面**」と「**育みたい側面**」がある  
生活習慣の育成指導、規律指導から道徳・価値教育まで広くかかわっている

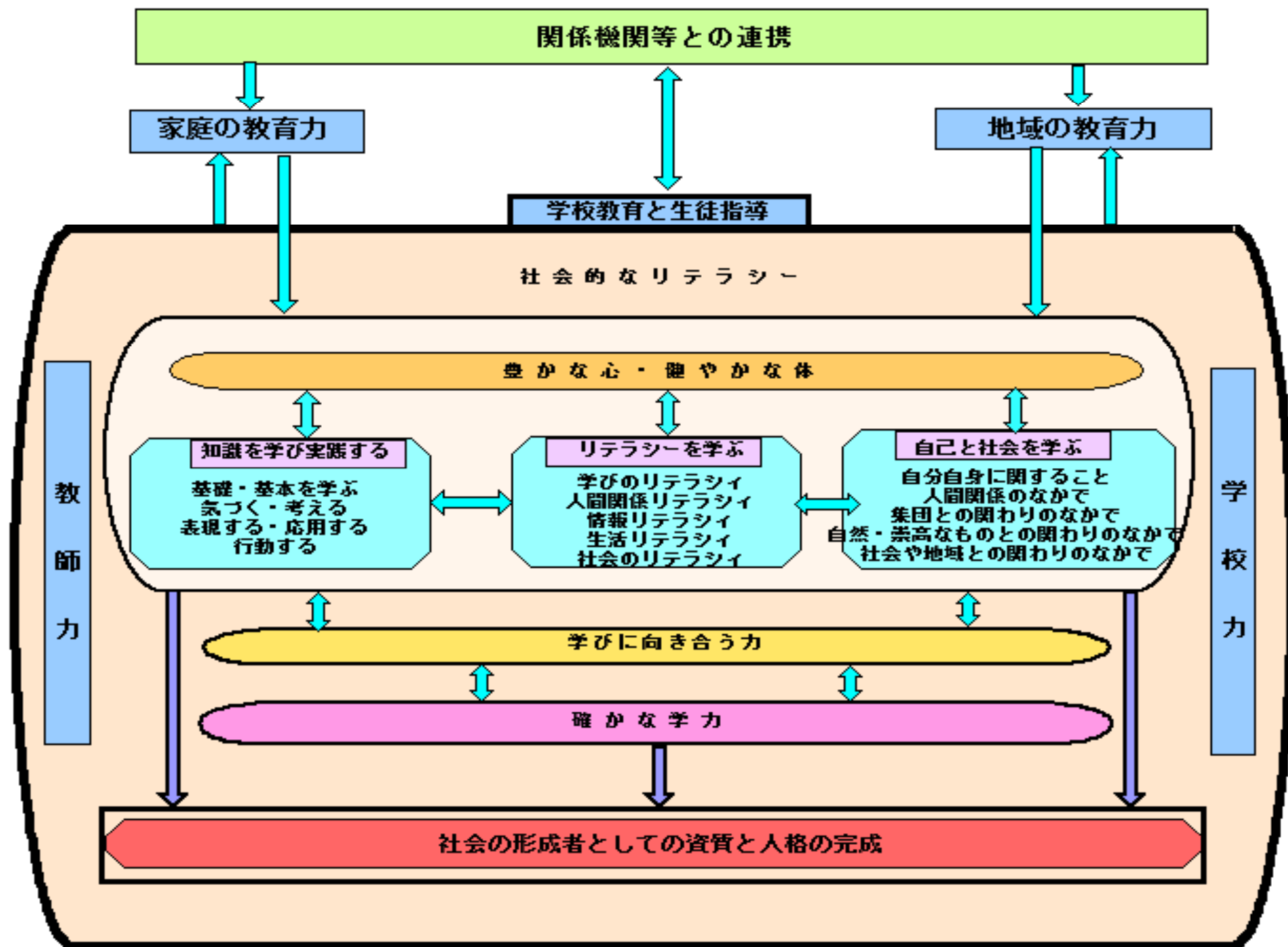
VI 生徒指導の究極の目標は  
「社会的なリテラシー」の涵養

『生徒指導提要』第8章第4節より



<社会的なリテラシーの育成>





関係機関等との連携

家庭の教育力

地域の教育力

学校教育と生徒指導

社会的なリテラシー

豊かな心・健やかな体

知識を学び実践する

基礎・基本を学ぶ  
気づく・考える  
表現する・応用する  
行動する

リテラシーを学ぶ

学びのリテラシー  
人間関係リテラシー  
情報リテラシー  
生活リテラシー  
社会のリテラシー

自己と社会を学ぶ

自分自身に関すること  
人間関係のなかで  
集団との関わりのなかで  
自然・崇高なものとの関わりのなかで  
社会や地域との関わりのなかで

教師力

学校力

学びに向き合う力

確かな学力

社会の形成者としての資質と人格の完成

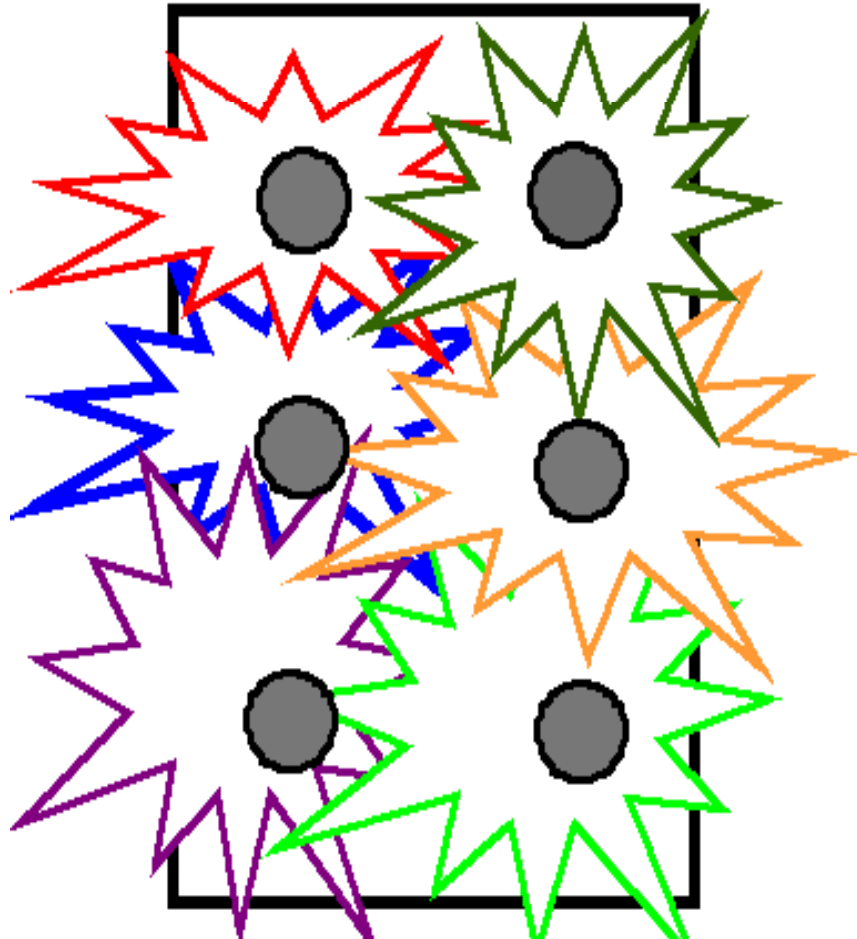
## おわりに

協働的生徒指導体制の構築による組織的対応は問題行動の多様化・重層化・不可視化のなかで不可欠な体制

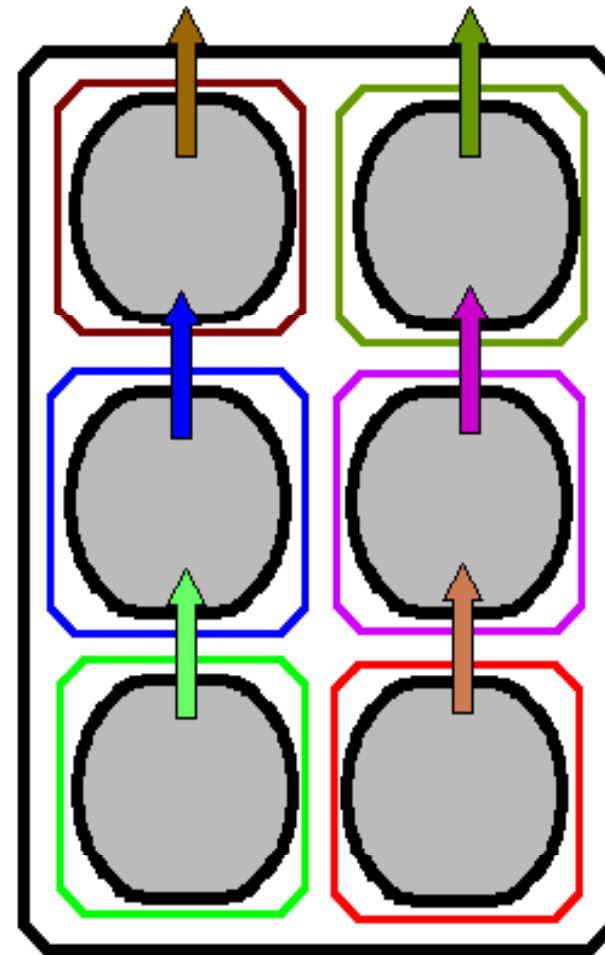
- ①協働性は「同僚性」という基盤があって、はじめて可能
- ②「同僚性」は、職場で互いに気楽に相談し・される、助ける・助けられる、励まし・励まされることのできる人間的な関係をつくりだすこと。
- ③それは、教師個々人のメンタルヘルスの観点から構築することが求められる(教師の「抱え込み」、バーンアウト等)
- ④「協働性」は、異なる専門分野の人間が、共通の目的のために対話し、新たなものを生成するべく協力して働くこと

## 仕事観の違いと同僚性の違い

A型組織



B型組織



お節介もあるがお互いにお世話の秤に乗る/ 長所・欠点を相互に補完し支え合う/ スキルの伝承/ 組織へのアイデンティティとプライドの醸成/ 信頼資本・社会関係資本のストック/ 危機への組織としての対応力 etc.

## 引用参考文献

- 文部科学省 『生徒指導提要』 教育図書 2010年 ¥290
- 森田洋司 『いじめとは何か－学校の問題・社会の問題』  
(中公新書2066) 中央公論新社 2010年
- 森田洋司 「学校生活の充実を目指す生徒指導提要－生徒指導と社会的なリテラシーの育成」文部科学省編『文部科学時報』2010年9月(No.1616)
- 森田洋司監修『いじめの国際比較研究－日本・イギリス・オランダ・ノルウェーの調査分析』 金子書房 2006年

## 私事化とは

- ・ 社会的な空間や道徳的意味空間を含む意識空間を「公的領域」と「私的領域」に二分するとすれば、当該社会におけるその比重が「公から私へ」と高まる社会全体の動向を言う
- ・ ガバナンスにおける「公」と「私」の関係価値の変化としては、「タテのガバナンス」から「ヨコのガバナンス」「官から民へ」の移行として現れる。「新たな公共」という政策理念もその一つ
- ・ 共同体呪縛から解放され自由になり、個人の幸福を追求する意識・行動に正当性を認める社会へと移行
- ・ 公的な領域への関心よりも、私生活領域とその中心に位置する「自己」と「私」性への関心が高まる
- ・ 私事化の動向は、日本では60年代から徐々に進行  
ガバナンスの局面では70年代に「民営化」の流れが始まる
- ・ 人々の関心の比重は80年代に、より一層私事化へと傾斜  
「欲望自然主義」「私生活中心主義」「私さがし」「新人類現象」「ミーイズム」etc.

- 組織や集団から見れば、今までほどに個人を組み込みにくくなった現象として現れ、それを個人から見れば、組織や集団に今まで程に意味を見いだせなくなった現象として現れる
- 私事化にはポジティブな面とネガティブな面とがある  
「滅私奉公型」 → 「活私型」社会へ。歪みとして「滅公活私型」 志向  
私益 > 公益 (公共善)
- 「公」を基軸とした価値が脆弱化 → 「私」を基軸とする価値が浸透  
個人を取り巻くその場の雰囲気や状況、人々のまなざしを超えた価値観と行動の弱まり  
個の自己実現を図るとともに「公共」を基軸とした考え方と行動の育成が求められてくる
- つながりや連帯、支え合いが弱まり、共同性に揺らぎ
- 教育は①これからの社会モデルを構想しつつ  
②その社会像の下で、育成すべき人間像を構想し  
③社会的現実へとフィードバックし方向付ける社会的営為
- 生徒指導の今日的課題は「個人化 ← → 全体化」「私事化 ← → 公事化」  
のダイナミックスの制御と方向付けにある

【参考資料②】

## 社会や集団の構成員としての意識の涵養

～市民性意識(シティズンシップ)の基盤の醸成～

### シティズンシップ教育の目標

公共善の実現を目指して社会を担う主体的行動力の育成

一人一人が社会の一員として参画しながら  
どのように自己実現を図り、生きやすい生活を送るか、  
社会や人々が抱えるさまざまな課題にどう向き合い、  
協力し合って、より暮らしやすく活力のある社会づくりに  
取り組めるかを問うもの

自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることのできる  
人格を育成するとともに、それが、  
社会や集団の一員として、様々な場面で、具体的な態度や行動に  
現れる力を育成すること



【参考資料③】

## いじめとは何か

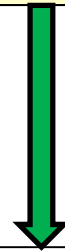
世界の研究者の定義に共通する最も基本的な要素

1. 当事者の主観的世界における被害性の存在  
(事実性の判断の基盤)
2. 力関係(影響力)の非対称性(アンバランス)の  
乱用

## 力関係の非対称性(アンバランス)とその乱用

「力」とは「影響力」を意味する

人が関係を結び集団や組織を作り、社会生活を営むにあたって  
不可欠で、普遍的な要素



「関係性」の悪用・乱用である「いじめ」は  
**どこにでも、誰にでも起こりうる**

いじめと同じ地平で起きる社会問題

力関係の非対称性の乱用は  
大人社会の**パワー・ハラスメント、セクシュアル・ハラスメント**  
**児童虐待、高齢者虐待、ドメスティック・バイオレンス**  
**アカデミック・ハラスメント**等に共通する本質的な要素

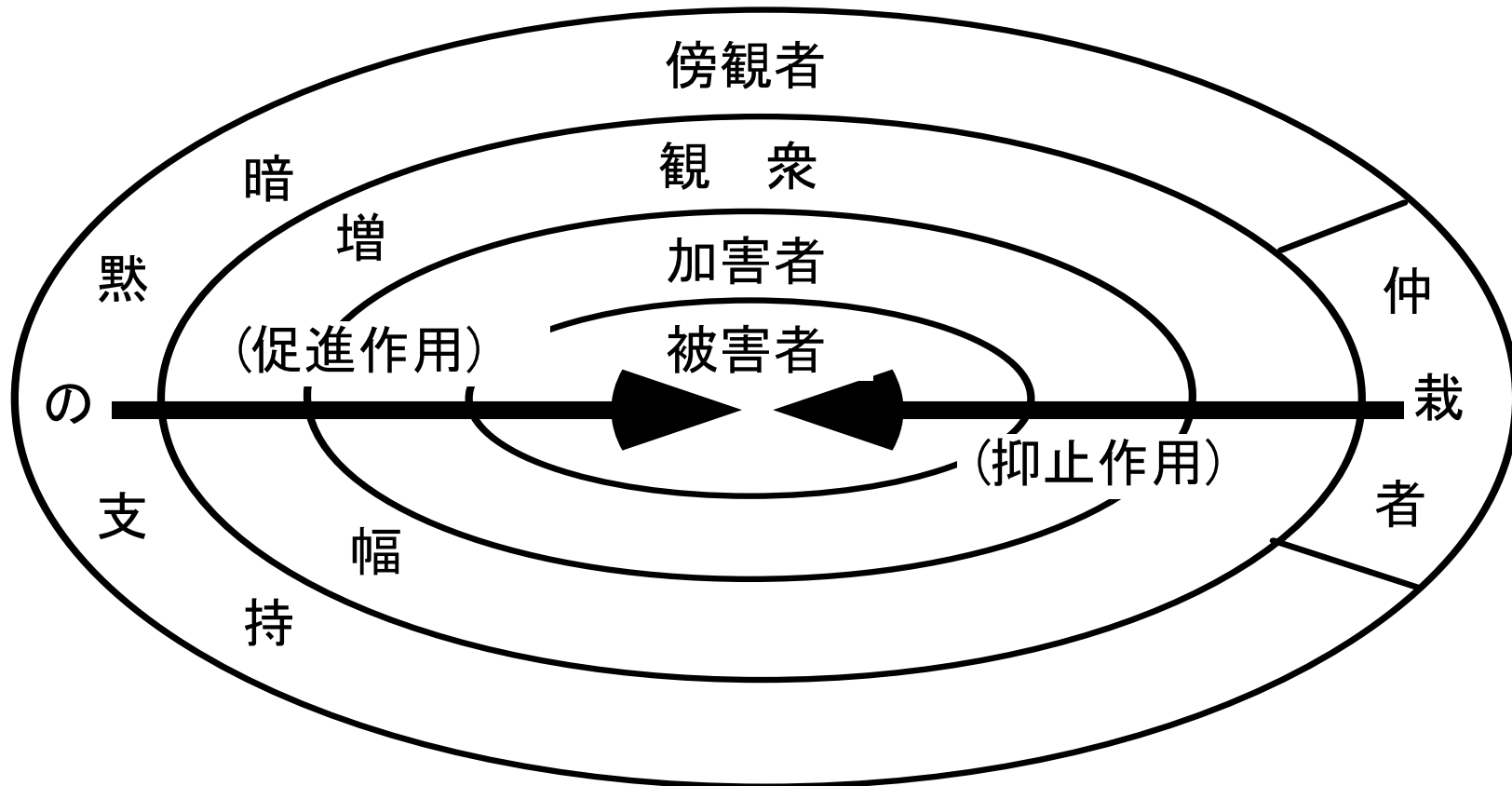
いじめ問題への対応は、いじめだけに特化するものではない  
子どもたちが生きるにあたって直面する現実の課題

パワー資源の使い方と乱用をコントロールする力の育成

人命・人格・人権の尊重、思いやる心や他者との調整能力、  
課題解決力、社会・集団の一員としての権利と義務・責任能力  
公共の精神、支え合い、社会・集団づくりへの参画・・・

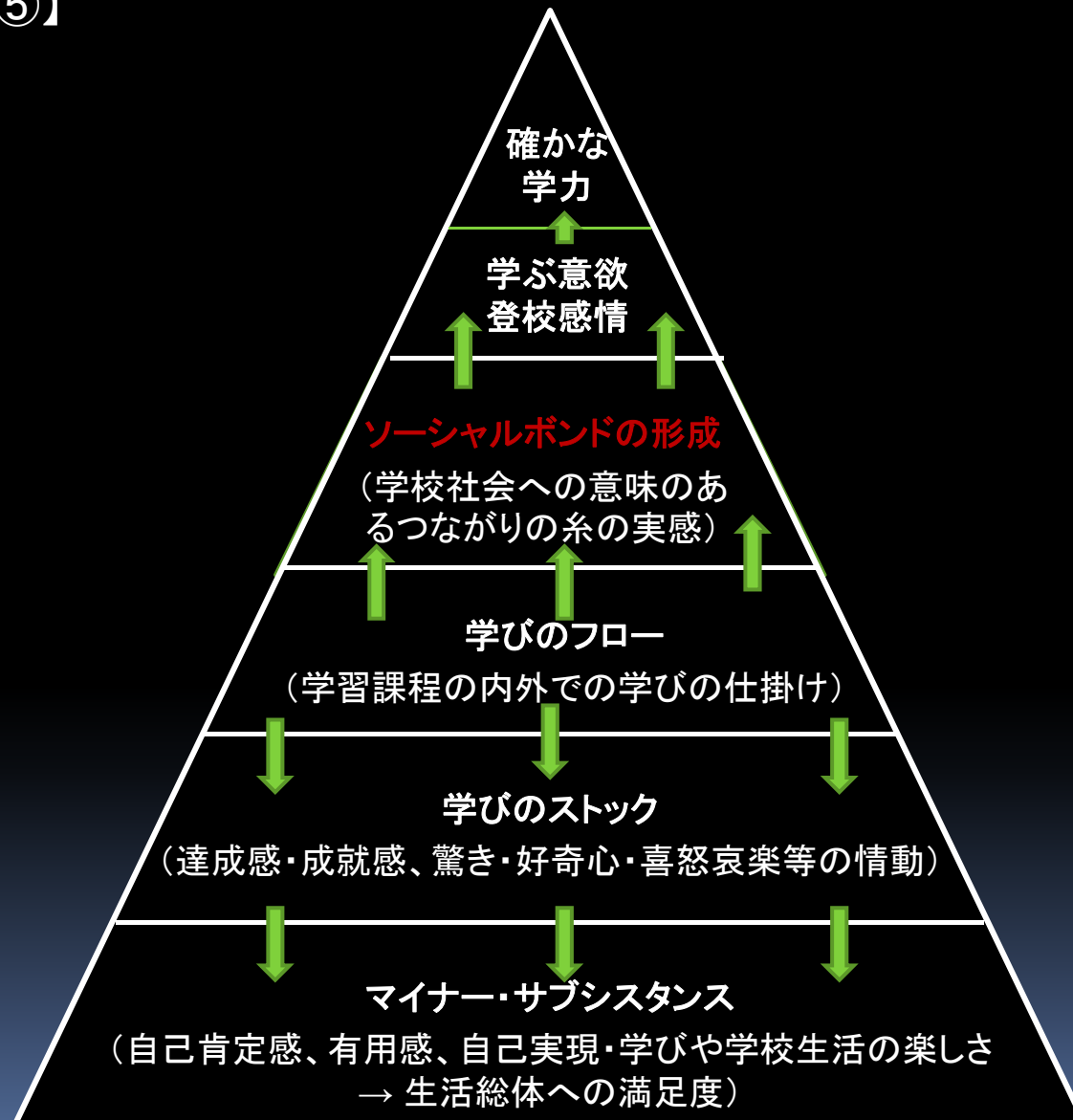
いじめの止まりやすい国かどうかは  
その国の教育力と国民の成熟度による

【参考資料④】 いじめの四層構造モデル(森田 1985)



社会や集団の秩序の維持は集団内の逸脱への**反作用(自浄作用)**による

【参考資料⑤】



「ソーシャル・ボンド」と「確かな学力」の育成